

## はじめに

「題名のない音楽会」というテレビ番組がある。1964年から始まって現在まで続いている長寿番組だ。作曲家の黛 敏郎が番組開始時から亡くなるまでの33年間にわたって司会を担当していた。現代音楽を積極的に取り上げるなど、意欲的な姿勢が感じられる良い番組だった。もっとも黛の政治的立場が時々番組の中に反映されることがあり、それはいただけなかったが。

いつの頃かはっきりしないのだが、ある時たまたま見たこの番組に、4歳か5歳くらいと思われるひとりの女の子が登場した。この子は絶対音感というすごい能力を持っていて、どんなむずかしいメロディでも楽譜に書き取ることができると黛は紹介した。そして、比較のために呼ばれたおとなのジャズ・ピアニストとポップスの作曲家を加えて、実験をして見せた。音楽大学の入試などで行われる聴音試験のようなものだが、与えられたのは、アントン・ウェーベルンの音列技法の音楽のような、とてつもなく難しいメロディである上に、始まりの音も与えられないときている。ところがその女の子は、何の苦もなくすらすらと楽譜に書いてみせたのである。当然、おとなの音楽家たちはまったくお手上げの状態だった。調べてみると、鳴らされたすべての音が正しく書き取られていた。これには、客席にいた聴衆が一樣に驚きの声を上げた。司会の黛も、この子が示した能力が、音楽、とりわけ現代音楽をやる上で威力を発揮するというようなことを言って、絶対音感がすばらしい能力であることを語っていたように記憶している。

この番組を見たのは、私が絶対音感の研究を始めて間もない頃だったが、当初から私はこの能力の音楽的意義について懐疑的な見方をしていたので、それを特別の音楽的才能として扱う番組の作り方に疑問を感じた。同時に、一般の人々はもちろん、音楽家も絶対音感を正しく理解していないことを痛感したものだ。

その後も絶対音感がメディアに取り上げられることがしばしばある。特に1998年に、最相葉月の「絶対音感」が出版されてベストセラーになると、絶対音感ということばが広く知られるようになった。この本によって絶対音感ブームに火が付いて、絶対音感に関する話題がメディアに登場することが多くなったが、メディアが流す絶対音感に関する情報には、間違いや誇張、偏りなどが目立つようになってきた。「絶対音感」という本自体は、数多くの音楽家や関連分野の研究者に対する直接の取材と、多くの文献資料に依拠して書かれたもので、ジャーナリストとして偏りのない立場で絶対音感をさまざまな角度からとりあげた労作と評価できる。しかし研究者への取材に基づいて書かれた部分はかなり専門的な問題に触れているので、予備知識がないと少し難しい。そのため正しく理解しない、あるいはまともに読んでいないのではないかと思われる人たちから見当違いの批判が向けられることがあるのは残念なことである。ただこの本は、多くの研究者への取材に基づいて

いるとは言え、専門の研究者によって書かれたものではないことから、これを読んでも絶対音感について正しく理解することにはならないという憾みがあるのは事実である。

このようなブームが起こる前から、絶対音感はこどもに対する音楽教育の世界で関心の的になっていた。音楽の道に進むためには絶対音感が必要だとか、音楽家はみな絶対音感を持っている、こどもが小さいうちに訓練しないと絶対音感は身につかないらしいなどのような、真偽が入り混じった話が広まって、小さなこどもを持つ親たちの気持ちを駆り立ててきた。絶対音感にあこがれの気持ちを持つ人も少なくないようだ。そうした人々をターゲットにした、絶対音感をつけることができる謳う教材や音楽教室も数多く存在する。その中には怪しいものも少なくないで、消費者はそうしたものに惑わされないように注意する必要がある。さらにインターネット・サイトを見ると、絶対音感をめぐってたくさんの書き込みがされ、中には誤解や見当違いの発言がやりとりされたりすることも少なくない。

絶対音感がブームになっている間も、私の絶対音感研究は続いていた。絶対音感をめぐる世間の混乱に対しては、絶対音感を研究している者として正しい情報を広く伝える義務があるわけだが、学会や専門誌に論文を発表してはいたものの、一般の読者向けにはほとんど何も書いてこなかったのは私の怠慢だった。遅ればせながらようやく取りかかって書いたのがこの本である。

私は認知心理学と聴覚心理学を専門にしており、この本はその立場から書かれている。一般に知られている心理学のソフトなイメージとは異なり、私の専門とする心理科学分野は実験で得られた結果を最も大切にする、どちらかというところ理系に近い性格の科学である。しかし純粋の理系の学問と違って、心理科学は人間の心の働きと行動を対象とすることから、実験によって明確な結果が常に得られるとは限らない。人によって心や行動の現れが違うのはもちろんだし、同じ人でもいつも同じように感じたり考えたり行動したりするわけではない。そのような扱いにくい対象を扱うのが心理学であり、その対象はわかりやすい目に見える形では現れないことが多いので、それを実験でとらえるのはきわめて難しい。だからこそ、心理科学では信頼できる根拠にもとづいた議論と、根拠のない怪しい議論とをはっきりと区別することが大切なのである。

このような立場に立つて、さまざまな誤解や偏った見方があふれている絶対音感の問題を扱う本書では、「絶対音感の神話」を多数取り上げている。ここで神話と呼んでいるのは、十分な根拠がないにも関わらず主張されている、あるいは広く受け入れられている考え方という意味である。絶対音感に関するそのような神話はたくさんある。それらは正しいかもしれないものもあるが、間違っているものも少なくない。本書では絶対音感をめぐるそのような神話を吟味する。

この本を書くにあたって私が柱に据えたのは、確かな証拠にもとづいて話を進めていくという原則である。絶対音感のような、真偽取り混ぜた多くの発言が交わされている問題を扱う際には、とりわけこの原則は重要となる。逸話や推測だけに基づいた話や単なる個人の感想は、真実を知るためにはほとんど役に立たない。本書

の大部分は、私がこれまで行ってきた絶対音感に関する研究に基づいている。その結果、科学論文のような堅い表現になってしまった部分があるかもしれないが、その代わり事実在即した話になるように努めたつもりだ。

実を言うと、心理科学的立場からの絶対音感に関する研究はそれほど多くない。本書で扱う問題についても十分な証拠がまだ得られていないことが多い。だから、現時点で何がわかっていて何がわからないのかを明確に区別して書いたつもりである。結果的に、本書の中では、私自身の研究を紹介する部分が大きな割合を占めることになった。それに比べて、ほかの研究者の研究を紹介することが少なすぎたかもしれないが、本書は科学専門誌にあるような中立的なレビュー論文ではないのだから、私の研究を中心に話を進めていくことを大目に見ていただきたい。

この本の目的は、絶対音感についての真実を読者にわかってもらうことである。絶対音感が驚嘆すべき能力であることは確かだ。まずそれがどのような能力なのかを明らかにする。しかし私がこの本で最も述べたいことは、絶対音感があまり音楽的とは言えない能力だということである。それどころか、それはへたをすると音楽にとって好ましくないように働くことさえあるというのが私の考えだ。これは絶対音感について広く受け入れられている見方に反するので、何の根拠もなく単に感想のような形でそれを述べただけでは受け入れてもらえないだろう。だからこそ、この本ではその見方を支える証拠を示すことに力を注ぐ。データに基づいて話を進めることに手抜きをするわけにはどうしてもいかないからだ。その結果、グラフや細かな説明が多くなって、読者を煩わしく思わせてしまうかもしれないことを心配している。できるだけわかりやすく書いたつもりだ。どうか少し我慢して私の話につきあってほしい。

さあそれでは、絶対音感の神話を超えて真実を探求する旅に出発しよう。

\*\*\*\*\*

## 第1章 絶対音感とは何か：絶対音感の概念をめぐる神話

- 「絶対音感」という言葉を吟味する：「絶対」神話と「完全」神話
- 絶対音感を定義する
- 絶対音感を測る際の問題
- 真性絶対音感と仮性絶対音感
- 反応の速さ
- 答の正確さ
- 絶対音感の下限
- 能動的絶対音感
- 絶対音感テスト
- 絶対音感を持つ人は耳がよいという神話
- 絶対音感がある人の聴覚世界：音がみなドレミに聞こえる？
- 潜在的絶対音感

## 第2章 音楽的ピッチ：音楽を構成する基本要素

- 物理現象としての音と聞こえとしての音
- ピッチの性質
- 音階のピッチ
- ピッチのふたつの側面：ピッチハイトとピッチクラス
- ピッチらせん
- 絶対音高と相対音高
- ピッチ輪郭と音程
- 音階と調性
- 和声感・調性感
- なぜ相対音感があるのか

## 第3章 絶対音感の事実：実験からあきらかになったこと

- 絶対音感の正確さとエラー・パターン
- 音色と音域による違い
- ピッチクラスによる違い
- 反応時間
- 半音よりも小さなピッチの違い
- ピッチ・カテゴリーの知覚
- 処理の自動化
- ピッチと音高名の相互作用
- ストループ効果
- 聴覚的ストループ効果
- 聴覚的逆ストループ効果

## 第4章 絶対音感を持つ人はどのくらいいるのか

- 稀少なものは価値がある
- 「10,000人に1人」神話：バッチェムの研究
- バッチェムの研究の問題点
- 「1,500人に1人」神話
- 音楽家の中での絶対音感の割合
- バッチェムの推定値
- サージェントの推定値
- 遺伝学者の推定値
- 絶対音感は東アジア系に多い？
- ドイツの調査：絶対音感の声調言語起源神話
- 日本の音楽学生における絶対音感
- 絶対音感の国際比較：上海音楽学院学生の絶対音感

- ・ 絶対音感の国際比較：ショパン音楽大学学生の絶対音感

## 第5章 絶対音感は音楽をする上で役に立つか：〈絶対音感＝音楽的才能〉という神話

- ・ 音楽的リテラシーの認知モデル
- ・ 曲を聴いて楽譜に書くまでの過程
- ・ 楽譜に書く
- ・ 絶対音感とは曲を楽譜に書くツールとして役に立つ
- ・ 聴音テスト
- ・ 聴音テストで何を見るのか：聴音テストの神話
- ・ 聴音テストの妥当性
- ・ 曲のイメージを楽譜にする
- ・ 楽譜から音楽を読み取る
- ・ 楽譜を見てすぐにメロディを正しく歌う：初見視唱
- ・ 絶対音感を持つ音楽家が語ったこと

## 第6章 絶対音感を持つ音楽家：モーツァルトの絶対音感の神話

- ・ シャハトナーのヴァイオリンの神話
- ・ ヴァチカンのモーツァルト：ミゼレーレの神話
- ・ すでに3点は存在していた楽譜
- ・ 幼いモーツァルトの絶対音感の神話
- ・ モーツァルトが真の天才だった証拠

## 第7章 絶対音感を持つ人の相対音感

- ・ 絶対音感とは音楽的に価値があると言えるか？
- ・ 音程識別の実験1
- ・ 絶対音感を持つ人の相対音感とはなぜ不正確だったか
- ・ 音程識別の実験2
- ・ 絶対音感保有者は音痴？
- ・ メロディを聴き比べる
- ・ 絶対音感保有者のメロディ識別能力
- ・ 楽譜を見ながらメロディを聴く
- ・ 絶対音感保有者の工夫
- ・ ポーランドの音楽学生に行った実験
- ・ 相対音感の国際比較
- ・ 日本の音楽学生はなぜ相対音感が弱いのか

## 第8章 絶対音感はどのように生じるのか：遺伝と経験をめぐる神話

- ・ 遺伝と経験の役割

- おとなは絶対音感を身につけることができるか
- マイヤーの絶対音感訓練
- いくらかの訓練効果はある
- カッディの研究：訓練法の比較
- ブレイディの挑戦：唯一の成功例？
- 絶対音感教材「バージ法」：本当に効果があるか
- プラセボ効果
- おとなは絶対音感を獲得できない
- こどもは絶対音感を獲得できるか
- 初期学習説
- こどもたちの絶対音感獲得過程
- 結論に飛びつく前に. . .
- ヤマハの音楽教育システム
- 江口式絶対音感プログラム
- 臨界期とは何か
- 絶対音感の臨界期仮説
- 絶対音感が学習できなくなるのはなぜか
- 絶対音感の遺伝的背景：家族を調べる
- 双生児を調べる
- 絶対音感遺伝子はあるか
- 絶対音感が進化する理由があるか

おわりに

巻末注・引用文献